

令和元年6月11日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02549

研究課題名(和文) 卷子本からコーデクスへ 「マルギナリア」を手がかりにして

研究課題名(英文) From Roll to Codex - the "Marginalia" in the Troubadour Manuscripts

研究代表者

瀬戸 直彦 (Seto, Naohiko)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：30206643

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：中世オック語(南仏語)の写本のひとつに、欄外の挿画として、テキストを巻物に記している姿が描かれていることに着目して、中世の抒情詩がもともと口承で伝えられたのか、あるいは最初から書記化されていたのかという問題を考察するために始めた研究である。具体的には、二つの軸を中心に研究を進めていった。

ひとつは、ジラウト・デ・ボルネーユという12世紀後半の著名なトルバドゥールの一作品の諸写本の検討とその校訂について、もうひとつは、現在カルカッソンヌに保存されている写本が唯一伝える『フラメンカ』という韻文物語の、とくに後半部分の解釈と、伝承過程における写本の脱落ないし抹消部分への着目である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世の作品が口承によるものか、最初から書記化されていたかという問題はジャンルによっても時代によってもアプローチの仕方が異なる。一律に解答が出るわけではない。本研究においては、12世紀末のオック語詩人のじっさいのテキストをもとに解釈をほどこし(内的な批判)、ヴァリエーションを勘案して校訂のさいの欄外挿画の意味(外的な批判)をさぐってみた。口承という曖昧な概念ではなく、諸写本に書記化されたそのテキストを地道に検討すること、また、抒情詩だけではなく、長い物語(『フラメンカ』)を俎上にのせることによって、唯一残されたその写本のマテリアルな姿(脱落・抹消など)を現代のわれわれがいかに受容すべきかを示した。

研究成果の概要(英文)：Paying attention to the "marginalia" (sketch added by scribe beside the text : Ms. N occitan), this study aims to consider, in the medieval occitan lyric poetry, the oral tradition and the "writing tradition".

Our principal interests are fixed on two subjects : primo, critical edition of the poem 'Leu chansonet'e vil' (Giraut de Borneil, PC 242, 45) in which the technique of this esoteric poet called "master of the troubadours" is, we hope, clarified. Secundo, interpretation of the lacks of some folios and the delates of some lines in the Roman de Flamenca (13th century). These two subjects reflect the complicated, but interesting situation of the textual transmission.

研究分野：中世フランス文学

キーワード：写本 トルバドゥール 中世南フランス ジラウト・デ・ボルネーユ 校訂 フラメンカ

1. 研究開始当初の背景

1981年9月にミュンヘンで開催された国際古書体学会議において、カリフォルニア大学のリチャード・ラウズが、UCLA所蔵の初期印刷本(インキュナブラ)の装丁に用いられた遊び紙2葉の鞣皮紙(断片)を発見したことを発表した。これは中高ドイツ語によるラインマル・フォン・ツヴェター(...1227-1248年以降)の教訓詩(格言詩ともいう)が記された卷子本の断片の実物であった。これはセンセーショナルな発見として、驚きをもって迎えられた。というのも、抒情詩を収録するのはもっぱら冊子本(コデックス)であって、卷子本(巻物 *volumen*)については以前からその存在の可能性は指摘されていたものの、現物が残っていなかったからである。

一般に、古典古代の文学作品は、パピルス紙による卷子本に記されていた。それが古代と呼ばれる時代の終焉時から、じょじょに鞣皮紙による冊子本に移行していくといわれている。しかし古代を過ぎて、中世の時代に入って、作者が作品を構想するとき、あるいは着想したときに、それをどのような支持素材(現代のメモ用紙など)に記したのか、写字生がいかにしてそれを写本として保存したのか、それがどのような過程を経て、現在にまで伝わったコデックスとして残されることになったのかは、必ずしも明らかではない。

抒情詩に限っていえば(というのも叙事詩などはまた別の条件があったであろうから)、すでに1887年にドイツの文献学者グスタフ・グレーバーがつぎのようなプロセスを提示していた。すなわち、まず字を書くことのできる詩人が鞣皮紙による巻物の上に作品を記し、それがジョングルール(歌い手、パフォーマンスの担い手)の手に渡って、かれらがそれを暗記する(メロディーのある場合は、暗譜もおこなう)。そしてそれらを詩人のパトロンや恋人、友人のもとで披露する。もちろん詩人がジョングルールを兼ねていた場合もあったかもしれない。それが繰り返されることで広まった作品を、後世の人や、ときには作者自身が、個人の全集のような形でまとめる。また、折々にまとめた、複数の詩人の詞華集も編纂される。こういったものをまとめたのが、現在に残るアンソロジーなのである。たしかに個人全集のようなものは、中世、とくに12-13世紀の時期の作品には、(現在まで伝わったものとしては)ほとんど存在していない。

この仮説については、その後は深い検証を経ることもなく、フランスでは問題にされることなかった。しかし、1960年以降、とくにダルコ・シルヴィオ・アヴァッレらイタリアの研究者によって支持されてきた。かれらは、作品校訂のめざすところは作者による「オリジナル」をさまざまな現存写本が示すヴァリエーションから演繹するところにあるとして、グレーバー以前のドイツのカール・ラハマンが新約聖書の本文を確定させようとしたように、抒情詩本文を校訂してきた。

しかしこの仮説による諸プロセスは、とくに初期の段階が曖昧模糊としてはいないだろうか。そもそも最初から作者が作品を鞣皮紙に記すことなど、ありえたであろうか。メモ用の蠟板とか小さな一枚の鞣皮紙があったのかもしれないが、これらは現存しない。ラウズの発見は、この初期の段階の史料の空白をすこしだけ埋めるものであったのは確かである。

2. 研究の目的

本課題の遂行者は、1989年ころより、作者と写字生と写本の問題にかかわってきた。わけでも1999年の「アヴァッレを中心としたイタリア学派の中世研究」という論文においてグレーバーの所説を検討し、アヴァッレの著わした『オック語文学の諸写本』(旧版は1961年)という著作を、やや批判的に紹介した。これはパリ第4大学に本拠をおく中世オック語文学研究所の紀要(*La France Latine*)にも、形を変えてフランス語で掲載された。その後、オック語のトルバドゥール作品のアンソロジーとしてひじょうに重要なC写本(フランス国立図書館 fr. 856、南仏おそらくナルボンヌ周辺で13世紀末から14世紀初頭に編纂されたいい)を調査してきた。またマルティン・ダ・リケールらにより発掘され、アヴァッレがその研究で指摘しているMartin Codaxと名付けられる断簡にも注目してきた。これは中世ガリシア語による抒情詩の一部で、きわめて貴重な史料であるが、一時散逸したとされ、謎めいた存在であった。1977年に所在が判明したという。音符も記されている鞣皮紙の一葉であり、13世紀末から14世紀初頭のものとしてされる。グレーバーの推定した、作者による初期のメモ原稿の可能性がある(リケール)。

また、イタリアで13世紀末に作られたとされるN写本(ニューヨークのピアポント・モガン図書館所蔵 819番)は、何人かの詩人の作品の欄外に挿画としてその内容が描かれている。フォルケ・ド・マルセイユという13世紀初めにトゥールーズ司教となった著名なトルバドゥールの一作品には、いわば「イラストレーション」としてきわめて興味深い挿画がある。「私が恋人のために詩を作ると、2語記したところで必ず3語目には倒れてしまう。恋人に相手にされない私は、それほど悲しいのだ」という部分である。詩人ないしは写字生がテキストどおりに倒れかかっているこの挿画をよく見てみよう。巻物は横向きに置かれ、詩人の左右にはその両端が垂れている。通説では、古代のパピルスによる巻物は、横置きにして欄構成で記されていたが、中世以降の巻物は鞣皮紙を縦置きにして、一段で書くようになったという。本報告の1で述べたラウズの発見による断片は後者である。してみると、N写本のこの部分の

挿画は古代のモチーフをそのまま踏襲したものではなかろうか。これをもって詩人がじっさいに巻物をを記したところだとするのは難しくなる。古代の伝統としての挿画のモチーフはすでにさまざまな文献において検討されているが、N写本においてはその挿画全体をさらに詳細に調べることにより、その性質が明らかになると思われる。

この写本の挿画は一種の「マルギナリア」(欄外の注釈)ととらえることができる。欄外注釈は当時の神学・宗教写本には頻出する。18世紀のピエール・ベールによる『歴史・批評辞典』はその集大成ともいえるだろう。中世の抒情詩のこのN写本もその系譜の中でとらえられないであろうか。

そして、この手掛かりの意味を探求することにより、これまでの作品校訂の方法論を再検討することができるかもしれない。「オリジナル」がひとつであり、その本文を確定するのがテキスト校訂の目的であろうか。作者が神ならぬ、俗人のトルバドゥールである場合、初期の段階で作者自身が改作していた可能性もあるし、のちのアンソロジーが編纂される過程で、写字生ないしは編纂者、編纂を依頼したパトロンの介入の可能性も否定できない。C写本はそれを如実にしめす格好の例である。従来等閑視されてきた欄外挿画も作品の受容のごく初期の一段階としてとらえて、ひとつの固定した本文という固定観念を再検討しようと思う。

3. 研究の方法

本研究課題は、校訂の問題に帰着するという点で、文献学的であり、写本の欄外挿画と「マルギナリア」の関連を探るところから、美術史や広い意味での「写本学」にかかわる。また中世南フランスのトルバドゥールのテキストをベースにしながら、中世ドイツ語の抒情詩やガリシア・ポルトガル詩の写本断簡をも勘案すれば、「学際的」と称してもよいかもかもしれない。活字化された現代の校訂本による作品解釈だけではなく、このような一種の「メタテキスト」である写本欄外挿画と、12 - 14世紀に編纂された抒情詩写本という媒体(支持素材)を探ることで、個々の作品を独立して読むだけでは見えない部分が浮き彫りになるのではないかと考えた。

具体的には、まず、N写本にも収録されている13世紀の大詩人、ジラウト・デ・ボルネーユ(1167以降-1199年以降)の80篇にのぼる作品を、その大部分を収録するC写本から読み込んでみた。「トルバドゥールの巨匠」と当時より呼ばれながら、難解な作品が多く、それだからこそ、現代では、ベルナルド・デ・ヴァンタドゥールやペイレ・ヴィダルの華麗な詩のように一般に読まれることのない詩人である。そのさい利用したのは、1910-1935年にかけて刊行されたアドルフ・コルゼンのドイツ語による翻訳と解説による校訂版と、1989年にケンブリッジ大学から刊行されたルース・ヴェリティ・シャーマンによる英語訳と解説を付した校訂版である。中世においては評価が高く、写本の収録数もひじょうに多いため、ともに数十年をかけなくては完成できなかったものである。それぞれ労作であることは事実で、これらを批判的に詳細に検討してみた。

そして、とくに「容易で卑俗な歌を」*Leu chanonet'e vil*で始まる作品(作品番号242-45)を自分なりにC写本をもとに校訂し、解釈をほどこしてみた。これは16写本に収録され、R写本にはメロディーが付され、N写本には欄外挿画がほどこされている。コルゼンもシャーマンもCua(R)という写本を底本にしている点ではおなじである。しかし、両者のテキストを子細に検討すると不備な点が多数残っていることが確認できた。私がC写本をもとにした校訂作業をつうじて、またN写本における欄外挿画を手掛かりにしながら了解できたことは、以下のとおりであった。すなわち、ジラウト・デ・ボルネーユという詩人の難解さは、各詩節、各行のしめすイメージ(作品より読者や聞き手が思いうかべるイメージ)が直線的にわかりやすく構成されているのではなく、むしろ黙過法 *reticentia* ともいうべき、故意に論理を明瞭にしない一種のレトリックが原因なのではないかということである。

4. 研究成果

(1) ジラウト・デ・ボルネーユについて

ジラウト・デ・ボルネーユという詩人はそもそも、その作品が敬して遠ざけられてきたという経緯がある。上記3で記したように、従来より、そのなかでもとくに難解な作品のひとつとされてきた作品45を解釈することによって、この詩人の創作の特色の一端を明らかにできたかと思う。そして、従来の二種の校訂版が、必ずしも満足のいくものではないこと、たとえばヴァリアントの提示のしかたに不備があることをしめた。このとりあえずの成果は、2016年度の『早稲田大学大学院文学研究科紀要』に発表し、これを出発点にして、2017年7月にはフランスのアルピにあるトゥールーズ大学シャンポリオン研究センター(Institut national Universitaire Champollion)において発表をおこなった。なかでも、その75行目のヴァリアントに着目し、底本のC写本の読みと、他の15写本の提供する読みを校合して作

品の年代推定と解釈をしめした。この発表の内容は2019年度に刊行される予定の、この学会の報告集に収録される。査読委員のドミニク・ビイ氏(トゥールーズ大学教授)からは、旧知の仲ではあるが、きわめて厳格で的確な指摘をいただき、彼との頻々なやりとりのちに原稿を、おそらく適切に推敲し、訂正することができた。

(2) アササンについて

ジラウト・デ・ボルネーユについての私のトゥールーズ大学での研究発表においては、(1)に述べたように、作品45の第75行目を含む第7詩節(71-80行)を俎上にのせておいた。そこは、一部の写本が比喩的な意味で「暗殺者」(アササン)という表現を用いている部分である。「これ以上のひどいアササンを彼女は送ってきたことはなかった」*la plus mal ancessi noquam saup enviar* という詩行である。これがこの作品の成立年代を探る手掛かりになると考え、「アササンという単語の初出について」(『Études françaises 早稲田フランス語フランス文学論集』)において、12-13世紀における中世ラテン語の史料(十字軍の時代におけるイスラム教シーア派の一派にあったとされる「山の長老」伝説に関連するリゴルドゥスとギヨーム・ル・ブルトンによる『フィリップ・オーギュスト事績録』、リュベックのアルノルド『スラヴ人年代記』など)、オイル語の作品(ティボー・ド・ブラゾンらの抒情詩、武勲詩『ボードワン・ド・スプール』、『ギヨームの遁世』、『ギヨーム・ル・マレシャル物語』など)オック語における例(アイメリク・デ・ペギヤン、ジャウフレ・リュデルらの抒情詩、長編物語『フラメンカ』など)を探索してみた。オック語文献においては8例ほど見つかり、文字通りの意味から、比喩的な意味まで、コンテクストによりさまざまな意味をしめしえたことを立証した。

(3) 『フラメンカ』について

南フランスにおいて13世紀の中葉から末にかけて記された、作者不詳の物語『フラメンカ』は、現存する唯一の写本がカルカソンヌ市立図書館に保存されている(写本番号35)。1835-38年にかけて、フランソワ・レヌアールが初めて紹介したもので、1865年にポール・メイエルによる本格的な校訂がほどこされ、1901年にはその第2版が刊行された。その後、本格的な校訂は、グシュウインドのものをのぞいて出現しなかったが、21世紀に入って、イタリアのロベルタ・マネッティ、フランスのフランソワ・ズュフレとヴァレリ・ファッスールによるテキストがあらわれた。いずれも優れた校訂版である。私はこれらの新しい校訂を参照しながら、この物語の大団円における作者の大胆な表現技巧に着目してみた。そして、物語の最初と最後が欠けているにもかかわらず、全編をつうじて作者によるすぐれた構成が看取できることを、2018年度の『早稲田大学大学院文学研究科紀要』において検証した。また、この写本では、冒頭と巻末を欠いているだけでなく途中にも脱落部分や故意の抹消部分が見つかる。写本のマテリアルな側面を問題にあげて、今後の研究の方向性を指摘した。

当初の目的であった、写本の「マルギナリア」を手掛かりにした卷子本からコーデクスへの変遷を概観し、その知見をもとに校訂の問題を一刀両断に解決するということまでにはいたらなかった。これは当初から予想されていたことではあった。また、ガリシア・ポルトガル詩の断簡の詮索については、私の分野を少々超えていることもあり、とくに進捗はなかった。しかし、このような複雑多様な様相をしめすコーパスでは、まず個々の分野や個々の写本、そして各詩人の作品を細かく検討し、従来の校訂版を子細に調べたうえでなくては何も立証できないであろう。その意味で、ジラウト・デ・ボルネーユという難解をもってなる詩人の作品を涉猟しえたこと、これまでの校訂の不備を身をもって実感できたことは収穫であった。長編韻文物語の『フラメンカ』に視点を向けることができ、その欠損部分の研究の端緒がつかめたことも私にとっては重要な一歩であった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 6 件)

瀬戸直彦「卷子本からコーデクスへ 写本欄外挿画の語るもの」『Études Française - 早稲田フランス語フランス文学論集』第23巻、2016、pp. 80-94.

瀬戸直彦「トルバドゥールの師匠」ジラウト・デ・ボルネーユの黙説法(作品45)』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第62巻、2017、pp. 171-189.

Naohiko Seto, « "Bela domna ab fresca color" : misogynie occitane dans le *Secret des Secrets* », in *Occitànica en Catalonha : de tempses novèlas perspectives, Actes de l'Xien*

congrès de l'Association Intenationala d'Estudis Occitans, tèxtes editats per Aitor Carrera e Isabel Grifoll, Universitat de Lhèida, Departament de Cultura, 2017, pp. 649-659.

瀬戸直彦「アササン assassin という単語の初出について」『Études Française - 早稲田フランス語フランス文学論集』第25巻, 2018, pp. 22-41.

瀬戸直彦「太陽が恥じらうかのように赤く昇ると」- 中世南仏の物語『フラメンカ』をめぐって』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第64巻, 2019, pp. 203-218.

Naohiko Seto, « Quelques remarques sur un texte du 'Maistre dels trobadors': *Leu chansonet' e vil* (Giraut de Borneil : PC 242, 45) », in *Actes du XIIIe Congrès de l'Association Internationale d'Etudes Occitanes*, Université de Toulouse-Albi, 2019 (予定)

〔学会発表〕(計 1 件)

Naohiko Seto, « Quelques remarques sur un texte de 'Maistre del trovadors': *Leu chansonet' e vil* (Giraut de Borneil, PC 242, 45), in 12^e Congrès de l'Association internationale d'Études Occitnaes, 10-15, juillet 2017 (2017年7月10日, トゥールーズ大学シャンポリオン研究センター(アルビ)) .

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者 なし

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。